

2014年度 近世史グループの活動

鎌谷 かおる

(総合地球環境学研究所)

1. 活動の概要

近世史グループは、FS・PRの段階から多くのメンバーが在籍し、すでに独自で調査・研究をおこなっているフィールドでの個別事例の研究を遂行する形で、本プロジェクトの課題にそった活動を行ってきた。FS期間中は、個別事例の蓄積による、気候変動と近世社会の関係の分析に、日本列島全域を見渡す歴史人口学の研究を加え、FRに向けて準備を行ってきた。2014年度のFR開始以降は、各メンバーの個別事例の強化を図るためメンバーを増員し、また全国的な物価動向と気候変動の動きを比較するた

めに、経済学分野のメンバーの参加も得た。

近世史グループメンバーの研究テーマは、下記のとおりである。調査地は図1に示す。

佐藤大介 (東北大学・グループリーダー) 「南奥羽の気候変動と地域社会」

渡辺浩一 (国文学研究資料館) 「江戸の水害史研究」

中山富広 (広島大学) 「中国山地・瀬戸内海地域における異常気象・災害と社会的対応」

菊池勇夫 (宮城学院女子大学) 「近世北海道・東北地域の気象災害と藩・地域社会」

平野哲也 (常磐大学) 「江戸時代の北関東の生業・暮

近世の気候変動に対する社会の動きについて 様々な視角・地域・時期から分析



図1 近世史グループメンバーの調査地

らしと気候変動との関係について」

佐藤宏之（鹿児島大学）「南九州地方の気候変動と地域社会」

荻 慎一郎（高知大学）「近世における四国太平洋側地域の気候変動と地域社会」

武井弘一（琉球大学）「江戸時代の北陸の気候変動と地域社会」

高橋美由紀（立正大学）「近世における環境変化と人口変数の変動山田浩世」

高槻泰郎（神戸大学）「近世の米市場・経済動向と気候変動」

村 和明（三井文庫）「近世の経済動向と気候変動」

遠藤崇浩（大阪府立大学）「株井戸制度にみる水環境と地域社会」

郡山志保（加西市教育委員会）「近世における義倉・社倉の設置と気候変動」

鎌谷かおる（総合地球環境学研究所）「琵琶湖および淀川・大和川水系における気候変動と地域社会」

山田浩世（沖縄国際大学）「近世琉球・奄美における気候変動問題と地域社会」

2. 近世史グループの具体的な活動

(1) メンバー個別事例研究の開始

上記の様に、近世史グループは、日本各地を調査対象とするメンバーで構成されている。2014年度は、新たに6名のメンバーを追加し、研究対象地や分析視角を広げている。各メンバーは、それぞれの地域での研究をすでに行なっており、その蓄積をふまえて本プロジェクトでの研究を開始している。近世史研究は豊富にある古文書の翻刻に時間を有するが、ゼロからのスタートではなくこうした「既存の知」を用いて、本プロジェクトでの研究に取り組んでいる。この点で、今後、近世社会と気候変動の関係について、さまざまな地域での事例研究の蓄積が期待される。

(2) 特定の時期に注目した分析

古気候学グループが解析した年輪酸素同位体比による降水量データから、近世では享保期・天保期にめりはりのきいた気候変動があったことがわかる。その事実をうけて、変動の大きかった二つの時期、

天候記述のある日記の収集と解読作業（2014年～）（茨城県）「大高氏記録」

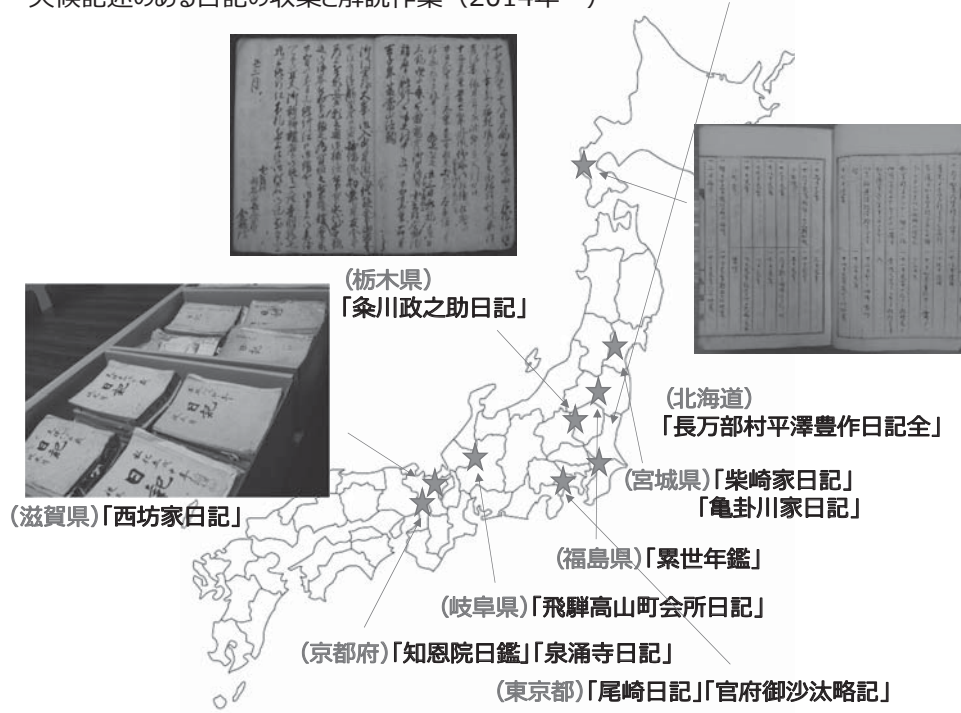


図2 調査中の古日記の所在地

およびその前後の時期に注目し近世の気候変動と社会応答を解明することを近世史グループメンバー共通の目標の一つに掲げることとした。

(3) 古気候学グループとの連携

近世史グループでは、古気候学グループ、とりわけ歴史気候学の分野と連携し、これまで歴史気候学のメンバーが把握していなかった古日記の調査を開始した。調査中の日記は、図2に示す。



(4) 全国的な社会の動きと気候変動の関係を読み解く

個別地域の研究と同様に、全国的な動きと気候変動の関係性を解明する研究も開始した。具体的には、次の4つに示す内容である。

- ・物価変動（高槻泰郎・村 和明）
- ・農業生産力（鎌谷かおる）
- ・人口変動（高橋美由紀）
- ・藩政改革・備蓄米（郡山志保）

【近世史グループ研究会について】

○第1回グループ研究会

2014年6月21日 総合地球環境学研究所

- 佐藤大介：史料調査報告
平野淳平：史料調査報告
中塚 武：日本近世における気候変動の特徴
災害年表の比較検討に関するフリーディスカッション

2014年6月22日 総合地球環境学研究所

- 山田浩世：新メンバーの研究紹介
武井弘一：新メンバーの研究紹介
萩慎一郎：新メンバーの研究紹介
高橋美由紀：新メンバーの研究紹介
高槻泰郎：新メンバーの研究紹介
2014年度の研究計画に関するフリーディスカッション

○第2回グループ研究会

2014年9月3日 総合地球環境学研究所

- 中塚 武：プロジェクト全体の状況
村 和明：新メンバーの研究紹介（「上方における支

配機構の確立過程】

- 高槻泰郎：「物価史研究に学ぶ近世日本の経済変動」
鎌谷かおる：「近世における年貢上納と気候変動の
関係－近江国を事例に－」
各メンバーの調査報告と今後の調査予定
総合討論

○第3回グループ研究会

2014年12月26日 東北大学東京分室

- 中塚 武：ごあいさつとプロジェクトの全体状況
について
郡山志保：調査作業報告（「藩政改革と気候変動－
問題の確認と作業状況－」）
菊池勇夫：盛岡領・仙台領における名子供制（解
体・存続）と刈分小作－凶作・飢饉へ
の対応を意識して
自由討論

○第4回グループ研究会

2015年2月22日 東北大学東京分室

- 中塚 武：プロジェクトの現状と来年度にむけて
遠藤崇浩：新メンバーの研究紹介
山田浩世：琉球・奄美における災害と社会対応－
1780年代を中心に－
各メンバーの今年度の成果報告と来年度の研究計
画について

2014年度は、合計4回のグループ研究会を実施した。

第1回のグループ研究会では、佐藤大介（グルー



プリーダー・東北大学准教授)が古気候学グループの平野淳平(帝京大学専任講師)とともに、天気記述のある古日記の調査報告を行ない、中塚 武(プロジェクトリーダー・地球研教授)が日本近世の気候変動の特徴について解説をおこなった。また、FR開始後はじめての研究会ということで、プロジェクトメンバー各自の研究対象地に関する災害年表等の既存の研究を紹介し、現段階で「わかっていること・あきらかになっていること」の確認作業を行なった。また、新たに加わった4名のメンバーによる研究紹介があった。

第2回の研究会では、2014年度からメンバーとして加わった、高槻泰郎(神戸大学准教授)・村 和明(三井文庫主任研究員)が、物価史研究の研究史と研究動向について発表した。その後、気候変動と日本近世の経済活動との関連を分析する可能性に関してメンバーとともに議論した。また、鎌谷かおる(総合地球環境学研究所プロジェクト研究員)が、近江国を事例に、年貢割付状(免定)を用いた、農業生産力と気候変動の関係について研究紹介を行なった。この回での研究報告は、いずれも、近世社会全体の動きと気候変動との関係性を提示したものであり、各メンバーの個別事例の蓄積とは別に、本プロジェクトを統合していく際に必要となる分析である。

第3回の研究会では、郡山志保(加西市教育委員会)が、『藩史大辞典』の記述から作成したデータをもとに、全国の藩政改革と気候変動の関係についての分析方法について報告をおこなった。また、菊池勇夫(宮城学院女子大学)は、東北地域の名子制度を事例に、これまでの研究蓄積を踏まえた研究報告

をおこなった。郡山の報告は、第2回研究会の報告と同様、近世社会と気候変動の関係を藩政改革という視点で読み解こうとするものであり、菊池の報告は、これまでの自身の研究を踏まえて、本プロジェクトでおこなう研究を本格始動させたものである。

第4回の研究会では、新規メンバーの遠藤崇浩(大阪府立大学)による研究紹介と、山田浩世(沖縄国際大学)による琉球・奄美地域の災害と社会応答についての報告があった。とくに、山田の報告については、琉球・奄美の災害に関する文献資料と古気候グループから得た年輪酸素同位体比の降水量データとの比較を試みている。

以上が2014年度の研究会の内容である。これら4回の研究会では、各自のフィールドについての、本プロジェクトにかかわる研究史の確認作業から始まり、新規メンバーの参入、そして、本プロジェクトの古気候学グループとの連携による研究の開始や、これまでの自身の研究蓄積を踏まえた上での、本プロジェクトにそくした研究が開始されたことがわかる。豊富な史料を用いての研究が可能な近世史では、その一方で、個別事例が多様で、「これが近世の気候変動に対する社会応答です」という形でシンプルに提示するには、時間を要する。そういう意味では、個別事例とはことなる視点、つまり全国的な動きと気候変動の関係を読み解くための新たな視点も、同時に必要となってくる。今年度の研究会で提示された、物価変動・農業生産力・藩政改革と気候変動の関係を読み解く分析視角は、それに応えることが出来得るものであると言える。なお、こうした本プロジェクトにおける全国的視野での分析は、FR開始直前まで、近世史グループのサブリーダーとして、本プロジェクトの活動に尽力された故浜野潔(関西大学)による近世の人口変動分析もある。その研究視角は、浜野と同じく歴史人口学の高橋美由紀(立正大学)が新規メンバーとして加入したことにより、継続していくこととなる。